



南モンゴルについて知ろう

「南モンゴル」とは、現在の中華人民共和国の内モンゴル自治区と、そこに接するモンゴル人の行政区の総称です。日本では、かつてこの地域を「内蒙古」、現在のモンゴル国を「外蒙古」と呼んでいましたが、「内」「外」とは北京の紫禁城を中心とする視点に立った呼び方であり、例えは箱根の関所より西を「内便」、東を「外便」と呼んでいるのと同じことです。モンゴル語では、それぞれゴビ砂漠の南と北を意味する言葉を冠して「ウブル・モンゴル」、「アル・モンゴル」と呼称しており、日本語に訳す場合には「南モンゴル」、「北モンゴル」とするのが、政治的中立性を保った用語法です。

中国政府が実施した民族説別工作の結果として、この熱帯に居住する2400万人のうち400万人がモンゴル人で、数万人の満洲人、朝鮮人、回族などを除いた残りは漢人となっていますが、漢人の中にもモンゴルのアイデンティティを持っている人が大勢います。また、20万人のダウル人もモンゴル語と非常に近い言語を話し、自分達はモンゴルの一部であるという意識を持っています。近年では鉱山開発による目覚しい経済成長が続いていますが、急速な都市化が進み、モンゴル語やモンゴル文化の消滅が危惧されています。

1912年、辛亥革命により清帝が倒れると、南モンゴルでは、北モンゴルに樹立されたボグド・ハーン政権とひとつになろうとする動きが起きましたが、北モンゴルを後押ししていたロシア帝国の支援を得ることができます。1915年のキヤフタ条約で、南北モンゴルはロシア帝国と中華民国の勢力圏に分割されてしまいました。1930年代になると漸漸に進出してきた大日本帝国の援助を受け再び民族独立の気運が高まり、龍王を首領とするモンゴル自治邦が樹立されますが、日本の敗戦とともに瓦解してしまいます。その後、モンゴル人は内モンゴル人民共和国や東モンゴル自治区の樹立を試みますが、いずれも力及ばず中国共産党の勢力圏に組み込まれてしまい、現在に至っています。

文化大革命の時代、中国は他の国境を接するソ連やモンゴル人民共和国を修正主義国家として敵視していたため、南モンゴルのモンゴル人は分離主義者やスパイの疑いをかけられ、モンゴル人の官僚、軍人、知識人などのエリートの大部分が粛清され、数万人が命を落としました。この事件以降、南モンゴルのモンゴル人は中華人民共和国を自分の祖国であると心の底から思うことができなくなってしまったのです。

内モンゴル人民党 <http://www.innermongolia.org/>
南モンゴル人権情報センター <http://www.smhrc.org/index.htm>
モンゴル自由連盟党 <http://www.lupm.org/japanese/index.htm>
フリー・ハダ・ナウ <http://www.free-hada-now.org>
シン・オン・ヒューマン・ライツ <http://www.free-hada-now.org/blog>

原案：Mergendelger
作画：BLE、六甲